

「学校を信頼して欲しい！」と云われてもねえ～：②

先日、ある知人に会った途端に、「聞いて！聞いて！」と請われた。

その話とは、ある中学校の音楽の特別授業に招かれたので、名前を直接呼びかけながら生徒と双方向性のある授業をしようと思い、授業前に「生徒の名簿を貸りたい。」と頼むと、「個人情報保護から、名簿はお貸しできません！」と教師に言われたとか。

また、演奏中、何人かの生徒の私語が始まったが教師は全く注意せず。見かねた知人のアシスタントが生徒に注意すると、その後は静かに聞いていたとか。

後で「どうして先生は注意しなかったのですか？」と尋ねると、「生徒のクラス担任ではないので、日頃のコミュニケーションが出来ていないので注意しなかった。」との返事だったとか。

知人から聞いて、全く眼を丸くして空いた口が塞がらないとはこうした話か。

個人情報保護法云々や共有体験がないとコミュニケーションが難しい云々のようなマニュアルや建前にすぎり、実際の教育活動場面での生徒との双方向性、関係性を大事にする教師というプロとしての応用力（知恵）を働かせずに、「我が校では特別授業もしてますよ。」と形式を整えるだけの浅はかさ。

さすが我が知人だけに黙っておらずに、教師に「今後、特別授業を依頼する時は、生徒に大きな名札を着けさせてください！」と云ったとか。

また、後で校長に「生徒に注意もできない教師の指導は、どうなっているのですか！」と話したという。

こうした知人の教育現場の実態を知ると、「教育活動とは、誰のために、どういうことをすることとお考えですか？」と、校長や教師にまず詰問したくなる。

教育技術や科目の指導スキル云々以前の、教育のプロとしての教師の意識と自覚の問題であり、校長の指導力の問題ですよね。

教師集団社会は案外閉鎖社会としばしば耳にするが、知人のような第三者や保護者が云うべき事を学校に云える勇気が必要な気がする。

これは、学校に理不尽なことを持ち込むモンスターペアレントとは明らかに違うと思う。

先に当 HP に「『学校を信頼して欲しい！』と云われてもねえ～（HP「雑学 BN」の随想等関係（Ⅶ）、2008.11.29.：参照）」を掲載したが、益々、その感を強くせざるを得ない知人からの話であった。